

嘉定県1974—1980年農業発展計画

解題・翻訳 山下龍三

〔解題〕

嘉定県の農業発展七ヶ年計画について

私は『中国研究月報』（321号・1974年11月）で、「嘉定県安亭公社新泾大隊1974～1980年農業発展計画」を紹介した。そのおり書いたように、この計画草案は1973年9月に制定され、1974年6月に改訂された。これを『学習与批判』誌が74年7期で紹介し、そしてそれが『紅旗』74年8期に掲載された。私が翻訳、紹介したのはそれについてであった。

その後、『学習与批判』誌（74年9期）は「経済問題研究」と題する特集のなかで、

(1) 46万人民の心願

嘉定県制訂和实施遠景規画的調整

(2) 嘉定県1974—1980年農業発展規画（修正草案）

(3) 訂規画先要抓路綫

嘉定県馬陸公社党委員会書記李慶涛

(4) 建設新農村永無止境

嘉定県朱橋公社灯塔二隊隊長徐正明

(5) 我們的大目標是共產主義

嘉定県外岡公社葛隆大隊貧農委員秦大弟と題する5篇の記事・論文をのせている。

ところで、(1)の「46万人民の心願」をかいた『学習与批判』誌の記者もいっているように、嘉定県新泾大隊の農業発展計画の反響はきわめて大きく、それは直ちに『紅旗』と『人民日報』に全文が紹介されると同時に、嘉定県の全農民に非常な関心を引きおこした。同県では連日有線放送で、

新泾大隊の経験が紹介され、業余文芸小分隊は新泾大隊のことを歌にした。多くの公社、大隊の幹部や貧農・下層中農がどしどし新泾大隊を参観・学習し、いたるところで、“新泾に学び・新泾に追いつけ”の声があがっている。

嘉定県には19の人民公社があり、46万の農民がいるが、かれらは新泾大隊に見習って別稿のような農業発展計画草案を発表した。なお新泾大隊の農業発展計画は1973年9月に制定、74年6月に改訂されていると同じように、嘉定県の農業発展計画も1973年8月に制定、1974年8月に改訂となっているので、後者が前者よりも計画作成は1カ月早かったことになる。

このたびの嘉定県農業発展計画を中心とする4つの記事・論文でとくに注目されることは現在の段階における社会主義新農村建設についての具体的プロジェクトと理念が明示されている点である。そしてまた「こんにち社会主義に取り組むとともに、明日の共產主義という大目標に思いをいたす」「共產主義の大目標を忘れたら、現状に甘んずることになってしまう」といわれているも、あわせ注目される。

私はこれらを読み合せて、「会主義新農村」といわれるものの映像が、より鮮明にわれわれの前に浮かび出てきたような思いがする。さらに、ひとこと付け加えると一つの県が、このようなやや長期の農業発展計画を発表したことは、これまであまりなかったことのような気がする。

ところでいま、新たな胎動が起りは始めている。それは農業その他広い分野にわたって、『遠景』（展望）計画があいついで発表されつつあることである。例えば、前掲『学習と批判』誌の74年10期には、「遠景」計画を取扱った5編の論文が収められている。

第1は、「我們是怎样制订“万台”规划的？（上海豐收拖拉機廠革命委員會）」である。これは1974-78年の5年以内に、年産5千台のトラクターを1万台にふやす増産計画であり、そこでは、①いかに少ない資金でより多くの仕事をするか、②生産発展のウイークポイントをさがし出し、それを如何に克服するか、③広汎な労働者大衆に依拠しつつ、いかに先進的技術によって自己を武装し、技術改造を行なうか、が述べられている。

第2は、「建立一支貧下中農自己的科学隊伍——上海縣七一人民公社調查」（施倉卓）である。ここでは、七一公社が農業「遠景」計画をたて、1980年までに1ム当り食糧2,200斤、繰綿250斤、あぶらの実400斤（注・前記嘉定縣のよりいずれも多い）生産すること、そのために同公社の700余名の農業科学研究隊伍をより充実して栽培指数を高め、稲・綿の品種改良にとりくむこととしている。

第3は、「制订和实施规划是深刻的思想革命（中共嘉定縣委員會書記李鈞）」である。ここでは、前記嘉定縣の「遠景」計画策定の過程で論争された点が明らかにされている。つまり「遠景」計画のもとで大々的な農地基本建設・水利工事にとりくむことによって、当面の農業生産に支障をきたし、減産になるおそれはないのかという点である。これはたしかに矛盾だが、その矛盾は大衆自身の思想革命によって乗り越えなければならないし、またそれは、可能であることを論じている。

第4は、「技術革新能手談革新规划」である。これは上海市革命委員會が、工業各方面の技術革新上のベテランを招いて聞いた座談会をとりまと

めたものである。ここでもやはり、上海市工業生産發展計画を中心にして、いかに「遠景」計画をたてるかが話し合われている。問題は、いかに創意性を發揮し、自力更生によって技術の面で世界の先進水準を乗り越えるか、という点にあった。

第5は、「让学生在學校学到更多的本事——劉行中學的調查」（宝山縣文教局・上海師範大學・上海市教育局聯會調查）である。この論文の最後では、次のような点が強調されている。「最近、農村ではどこでも社会主義新農村建設の遠景計画がたてられている。學校の党支部は、農村遠景計画の実現との関連において、劉行中學1974-80年の遠景計画をたてた。かれらは、プロレタリア教育革命をひきつづき深め、養成した卒業生を、ほんとうに社会主義新農村の必要とする新しい世代に仕立て上げるよう決意している」、という。

いま中国は、今年で第4次5カ年計画をおわり、76年から第5次5カ年計画に入る。第4次5カ年計画期においては、プロレタリア文化大革命、批林批孔運動をつうじて、工農業生産・技術革新などすべての面で、“新しい事物”がひきつづきに誕生した。「社会主義新農村」もその一つであり、またここに紹介した「遠景」計画もその一つである。これは当然ながら第5次5カ年計画と重なり合うものであると同時に、人民公社についていうならば、それぞれが、内容的に新しい發展・充実を行なうなかで、次の大きな飛躍期を準備しつつあるといえよう。たとえば、嘉定縣遠景計画においても同縣新泾生産大隊の場合でも、現段階ではひきつづき「三級所有で、生産隊を基礎とすることが強調されている。しかし遠景計画の内容を個々に検討した場合、三級所有そのもの（たとえば生産用具の所有）にも、大きな変化がみられる。たしかに広大な中国農村では、明日の「社会主義新農村」建設を中心に、大きく変わろうとしている。断片的な諸資料のなかにもその胎動が強く感ぜられる。

〔資料〕

嘉定県1974—1980年農業発展計画

(修訂草案)

(1973年8月制定, 1974年8月改訂)

プロレタリア文化大革命と批林批孔運動は、広汎な貧農・下層中農の社会主義的意欲を大いにかきたて、わが嘉定県の農業生産と各種の工作をおしすすめた。全県の食糧、綿花、油脂原料など主要農作物の例年の1ムー当り生産量はいずれも「全国農業発展要綱」にさだめられた指標をそれぞれ上回り、うち穀物の1ムー当り平均収量(1973年)は1,593斤(1斤は0.5キロ)にたっし、1965年より35%ふえ、「要綱」の2倍近くになった。このほか、林業、牧畜、副業、漁業も非常に発展した。だが、社会主義革命・社会主義建設の大いなる発展が、またもやわれわれに、新たな・より高い要求をだしており、広汎な社員大衆の階級闘争、2つの路線闘争およびプロレタリア階級独裁下の連続革命の自覚がいっそう高まったのちは、どんなに苦勞しても、社会主義新農村を建設しようとの願望が、より切実なものとなった。これらの状況のもとで、全県の貧農・下層中農やその他の革命的人民の共同の奮闘目標として、先進でもあり、適切・可能な長期発展計画をもつことが要求されるに至った。

いま、批林批孔運動が深まり・普及し・持久化しており、状況はますますよくなってきた。われわれの人民公社三級集団経済もいっそう強大になり、プロレタリア階級独裁の陣地もよりしっかりしてきたうえ、われわれは、社会主義農業を発展させ、社会主義的な農村工作をおこなううえで多くの新しい経験を積んだ。われわれが毛主席の革命路線を堅持し、広汎な貧農・下層中農・革命幹部に十分依拠しさえすれば、遠景を近景にかえ、社会主義新農村の建設をはやめることがまったく

可能である。

毛主席はわれわれに、「全面的に計画をたて、何回か点検し、年末にはくらべあう。これは三つの重要な方法である」とおしえておられる。全県の貧農・下層中農と幹部は全局と局部的ポイントをよりよくつかむために、経験をそのつど総結し・成果を発揚し、間違いを直すために、みな勇氣ある前進をはげますために、昔陽県の経験をよりよく学び、“農業は大寨に学ぶ”運動をより広く・深くくりひろげるために、嘉定県を大寨型の社会主義新嘉定に建設しとげるために、とくにこの7カ年計画を制定したのである。

(一) 人民公社の集団経済をより固め発展させる

人民公社の集団経済を固め発展させることは、農村の生産力を発展させる根本の問題である。県下19の人民公社が批林批孔運動のなかで、より固まり発展できるようにするために、次のことをやる。第1に“三級所有で・生産隊を基礎とする”という現段階での人民公社のこの根本制度を正しく遂行する。生産隊の集団経済発展にたいする公社・大隊両クラスの集団経済の促進作用を積極的に発揮させる。第2に、政治を最優先させ、たえず社会主義教育をおこない、資本主義的傾向を批判し、幹部・社員の社会主義的自覚を高め、ともに豊かになる社会主義の道を、しっかりとたゆまず歩む。第3に、“能力に応じて働き・労働に応じて受けとる”という社会主義的分配の原則を堅持し、“点数第1”という修正主義路線の影響を除去する。

(二) 食糧、綿花、油脂原料など各種

農作物の収量を大いに引上げる

1980年までに、食糧の例年平均1ムー（15分の1ヘクタール）当り収量を2,000斤にし、1973年の1,593斤より26%ふやす。綿花の平均1ムー当り繰綿の収量を200斤とし、1973年の109斤より83%ふやす。あぶらの実は平均1ムー当り収量を330斤とし、1973年の111斤より2.97倍とする。1975年には、食糧、綿花、油脂原料の収量をそれぞれ1,800斤、150斤、300斤にし、この2年間で計画指標の増産部分の50%をかちとるようにする。7年以内に、国家に商品化食糧4億2,000万斤、繰綿145万担（1担は100斤）、あぶらの実5,000万斤を提供する。蔬菜は品種が多様で、質は上等・多収穫のものをづくり、市場に均衡のとれた形で出す。その他の農作物も収穫を高めるよう努力する。

（三）養豚を主とする副業生産を積極的に伸ばす

1980年までに、豚を76万頭飼育し、平均1ムーにつき1.5頭、1973年比23%増とする。市場に肉で33万頭分出荷し、体重を平均160斤にふやす。魚の水揚げを淡水・海産合せて8万担とし、1973年の43,900担よりも82%増とする。キノコを300万平方尺栽培する。平均1平方尺当りの収量を1973年の0.94斤から1.5斤に高める。同時に、ガチョウ、アヒル、羊、兎、乳牛などの家畜・家禽、その他の副業もかなりの程度発展させる。1980年までに、副業生産の総収入を7,800万元にし、1973年比69%増とする。公社・生産隊に優良品種を提供してやるため、県は種畜場を経営する。

（四）植樹・緑化をやる

1980年以前において、宅地・村境い・道ばた・水辺で、樹の育つところにはどこにでも樹を植える。用材の樹木以外にも、果樹や薬材用の木をうる。公社・大隊・生産隊の牧場には、空地を利用してぶどう、なしなどの木をふやし、牧場を果樹園化する。みずすぎを主とする苗木1,500万本を育て、1980年には全県で2,000万本の植樹があるようにするとともに、樹木の手入れをよくし、竹林の管理をよくし、それを定期的に更新する。

（五）農地の水利の系統化を実現する

水利建設をひきつづきすめ、100日間雨が降らなくてもひでりの心配がなく、雨量6寸の大雨があっても冠水しないようにする。善瀏河、蘇州河、蘊藻浜の三大水系をいっそうととのえ、県内の乾河である西蘊藻浜や塩鉄河、雲長涇、桃浦河、蒲華塘などの河川を干拓・竣設し、全長74.5キロにわたって505万方（1方は10分の1立方丈。すなわち1丈平方で高さ1尺）の土を掘さくする。今年の冬から来年の春にかけ、蒲華塘、桃浦河などの河川を約140万方、干拓・竣設する。水を貯えて洪水をふせいだり、冠水排水の機能を高めるため、東・西の蘊藻浜、木瀆河および桃浦河にそれぞれ調節用、船用の水門と多用水門（套閘）をつくる。農地の水利は河網と道路をカナメとして、機械耕作と結びつけ、圃場の排水・灌漑系統を整頓して水利を系統化し、耕作の機械化に適応させる。灌漑・排水は、どの圃場にもゆきわたるようにするとともに、灌漑面積2,000ムー前後の大型機械灌漑を、1,000ないし1,500ムーの機械灌漑にかえ、ジーゼルエンジンを配備し、戦時のさい、電線を切って灌漑にそれを使う。

（六）土地を平らにし、園田化を実現する

安定・多収穫実現のため、その場所柄に応じてひきつづき高地を平らにし、くぼ地を改造し、飛び地を調整し、しだいに大小・高低さまざまの田を、それぞれ一定規格の長方形の農地にし、それによって排水・灌漑にぐあいよく、機械操作にぐあいよく、水田、畑で輪作および科学試験田の発展にぐあいよいようにする。1975年には全県にわたって、20～25%の耕地が基本的には園田化が実現できるようにする。その後は毎年、20%ずつ、計画実現の任務をくりあげていく。

（七）有機肥料をふやし、施肥水準を高める

1ムー当り2,000斤以上の食糧収量をかちとるためには、試験田の成功した経験によると、土壌を改良し、あらゆる方法をこうじて天然肥料を多

くたくわえることが必要である。そのため、第1に、養豚によって肥料をつくる。第2に、緑肥をつくり、川底のドロをすくって肥料にし、緑草をすき入れ堆肥をこさえる。第3に、都市から大便・生ゴミ、その他の雑肥を運んでくる。1ムーの耕地に毎年100担相当の豚・羊・灰分の有機肥料を施す。同時に、化学肥料の施用量を適当に高め、バクテリア肥料を大いに普及し、施肥方法を改善し、肥効を高める。生産隊は各隊ごとにアンモニア水池・大便池をつくり、肥料の貯蔵量をふやすとともに、アンモニア水で肥料分のもちをよくし、アンモニア分が逃げないようにする。

(八) 優良品種を積極的に育成・普及する

種子は、自分のところで選別・増やし、自家用に残し、自家用として使い、他からの調達を従とする方針をつらぬく。公社・大隊は種子場または種子隊を経営し、しだいに種子倉庫をつくる。生産隊は種子田を経営する。農業機械化と三毛作の実施という新たな状況・新たな特徴をもとにし、目標をたてて優良・多収穫品種を育成・普及し、たえず早熟で病害に強い・良質・多収穫の新品種をもって在来品種ととりかえる。在来品種の強壯性を強め、綿花の二代更新、水稻、麦の一級良種を更新し、あぶらな原種を更新する。

(九) 農作物の主要虫害・病害を基本的に

消滅し、除去する

例えば、油虫、螟(メイ)虫、紅鈴虫(産卵し綿実に害を与える)、紅蜘蛛(綿花の病虫で、成虫は赤いクモの形をしている)、ありまき、稲に菌の包子のつく病害(菌核病)、赤カビ病(稲の穂腐れ)、稲の紋枯れ病、イモチ病、綿花の紅葉枯れ病——などがそれである。同時に、その他の暴発性の病害・虫害の伝播・蔓延を防ぐ。県・公社・大隊・隊の植物保護隊伍を健全・強化し、病虫害の予測・予報や検疫の対象をきびしく規制し、駆除効果を高める。効果の高い・毒性の低い農薬や、天敵による駆除を積極的に普及する。

(十) 大衆的な農業科学実験活動を

積極的に繰りひろげる

県営の技術普及ステーション、種子ステーション、植物保護・検査ステーション、獣医ステーション、気象ステーションなど農業科学部門に積極的な役割りを発揮させる。県営の計量所は土壌・化学肥料の試験活動をくりひろげる。公社の科学実験ステーション、大隊の科学実験中心組を強化・向上させ、生産隊には1組(科学実験小組)4員(栽培員、水の管理員、植物保護員、種子員)をおき、健全化する。“三田”(試験田、高産田、種子田)をりっぱに運営し、社員の創造的精神をはげまし・支持し・適宜、増産の経験をひろめ、安定・多収穫の法則をさぐる。

(十一) 農業機械化の程度をいっそう高める

食糧、綿花、油脂原料など農作物は、作付けから収穫まで、ほぼ機械化を実現する、農業機械の製品の質を高めることに努力し、農機の科学研究工作に積極的にとりくみ、“両深”(深耕、深溝)三肥(堆肥、運肥、施肥)、4回の腰かがめ(田植え、移植、取り入れ、除草の際の)の機械化を重点的に解決する。耕作・植物保護・水陸輸送などの機械化程度をいっそう高めると同時に、蔬菜・畜産・水産などの機械化をいっそう高める。1980年までに、主要農機具は、平均して、各生産隊とも小型トラクター1台半、田植機1台半(移植機とセット)、収穫機・除草機、中耕機、あぜ立て機(開溝機)・移動式噴霧器・脱穀機を各1台、けん引用アタッチメント(小掛機)1台があるようにする。平均して、どの大隊にも中型トラクター2台、吸泥船3隻、小型曳船2隻、そして一部の大隊にはトラックがあるようにする。平均して、どの公社にも大型曳船2隻、中型トラクター22台、トラック10台あるようにする。各種の農機はセットにし、1台で各種の用途に供する。

農業機械がふえるにともない、県・公社・生産隊はそれに応じて農機管理機構と合理的な規則・

制度を設け・健全化して、農機の管理や使用をうまくやり、農機の効率や使用率を高めるとともに、
 保修を確実にする。同時に、農機の部品の供給、
 技術者の訓練工作に留意する。

(十二) 農機と道路・橋・水渠をくばりあわせる

農機用の道をつくり、人の通る道を調整し、経済的・実用的な農村道路網をつくりあげる。各隊の道はどれもUターンできるようにして、農機が田にふみ込まないようにする。トラクターの通れる橋を703カ所新設し、一步一步、機械耕作網をつくりあげる。トラクター道路の建設と結びつけ、しだいに地上水渠を暗渠をかえ、1,350キロの地下水渠をつくり、道の上には農機が道の下には水渠がとおるようにする。

(十三) 農村電力網を発展・改善する

三類の動力用電線（全電線の2分の1）を整えんとすると同時に、電線を500キロ延長する。1980年までに供電負荷を12万9,500キロ（実際の供電負荷6万4,750キロ）とし、1973年の54%増とする。各大隊は225・千ボルト・アンペア容量になるようにする。全県の負荷電圧を均等化する。華亭公社の俞橋と封浜公社に2つの変電所を新設するとともに、南翔、嘉定西門、外岡などの変電所を拡張する。

(十四) 耕牛を飼い、また小農具の機能を高める

農業機械化の発展と同時に、戦争に備えることから出発して、耕牛を育て繁殖させる。竹・木・鉄製品などの小農具の製造・供給・修理を積極的におこなう。

(十五) 県・公社・隊経営の工業を計画的に発展させる

農業に服務するという方向を堅持し、小型鉄網・化学肥料・セメント・造船・農機・工作機械・酸素製造など13の「五小」工場（五小工場とは小型の鉄網・セメント・化学肥料、電力、農業機械の五つの業種を指す）を拡張する。それらを整頓し固めたうえで、公社・生産隊経営の工業を計画的に発展させ、公社・大隊企業の生産額の、三級

（公社・大隊・生産隊）総収入にしめる比率を高める。基礎の弱い公社・大隊が、工業を発展させ・集団経済を強大にするのを援助する。三級農機修理網を充実・向上させ、一部の大きな修理も公社外には出さず、中小の修理は生産隊の外に出さずに済むようにする。公社・生産隊による土法の化学肥料、土法の農薬生産をさかんにし、バクテリア肥料の発展に力を入れる。大隊は「五匠（匠は職人）組」（左官・竹細工工・大工・床屋、仕立屋）をよりよく運営することによって、社員の便宜をはかり、生産に役立たせる。

1980年、全県の三級工業生産総額を4億元にたつするようにし、1973年比60%増とする。主要材料の年産量は、1977年前後には、鋼が5,000トン、セメントが8万トン、煉瓦が3億個になるようにする。公社・生産隊両クラスの工業蓄積のうち、公社の場合はその50%、大隊の場合はその60%を農業機械化と農地の基本建設にあてる。

(十六) 勤儉によって公社を運営し、

経営管理を改善する

公社・生産隊の集団経済は人力と設備を十分に利用し、人力を統一的にあんばいし、労働組織を改善し、経営管理を改善し、労働生産性を引き上げ、人力・物力をすべて出来るかぎり節約する。大衆に依拠して、民主的に経営し、経済計算を強化し、浪費をなくし、生産を高めつつコストを引き下げる。食糧と綿花をいっしょにつくる地区の農業コストを25%前後引き下げ、水稻区では30%前後引き下げるようにする。

(十七) 食糧の備蓄をふやす

1980年までに、全県の生産隊の集団食糧備蓄を2億9,000余万斤にし、1973年比4.4倍とする。それだと全県の農村人口が1年2カ月は食べれる。

食糧の節約を宣伝することによって、幹部や社員が自ら進んで食糧を計画的に使い、節約して使い、どの家にも余分の食糧があるようにする。

(十八) 社員の物質的生活水準をしだいに引き上げる

1980年までに、集団からの平均1人当たり分配収入を、1973年の177元から230元前後にふやす。一步一步分散している旧宅地を改造して新村をつくり、時期をわかちつつ、社員の住宅を修理・建造する。人造メタンガスの普及に力を入れるとともに、それを無害化肥だめの建造と結びつけ、1980年までには、5分の1の社員が新村に住めるようにするとともに人造メタンガスを使用する。社員の新村建造と結びつけて、警防施設を設ける。

(十九) 交通運輸・郵電事業を発展させる

水運網を十分利用し、船舶輸送を発展させ、水利工事と結びつけて航路を整備する。自動車道路網を一步一步ととのえ、それによって農業の機械化、交通運輸の発展の需要にこたえる。自動車道路を8区間、距離62キロにわたって修理する（8区間の名称は省略—記者）。

郵便事業をより発展させ、一步一步、電話の自動化、線路のケーブル化、通信の周波調節化（1対の電話線を同時に何台かの電話が利用できるようにすること）、配達の機械化をすすめる。

(二十) 農村の金融・商業工作をいっそうよくやる

貧農・下層中農に依拠して農村信用協同組合をよりよく運営し、信用貸付・決済・貯蓄業務を積極的に発展させ、公社・生産隊が財務工作をうまくやり、公社や生産隊の資金をうまく管理・使用し、そして財力をうまく統一的にあんばいできるようにする。

県・公社の商業部門は生産に立脚し、顔を農村に向け、生産・生活資料の供給や農副産品の買付け活動をよくやり、物資を統一的にあんばいする。貧農・下層中農に依拠して商業を経営・管理する。町からやや遠い大隊では、総合的な委託買付け・販売店を開設もしくは拡張して、生産・生活資料の供給やら、こまごました農副産品・廃棄物などの買付けをやる。大衆に依拠して市場管理をやる。

(二十一) 計画的に県城・鎮の改造をすすめる

県城・鎮（町）の工作にあたっては、農業を基

礎とする方針をつらぬき、各業種とも顔を農村に向け、農業を知悉し、農業を支援する必要がある同時に、城・鎮の生産・生活用の供水・排水状態を改善する。適切に「三廃」（廃ガス・廃水・廃渣）をなくすことにとりくみ、公共の場所や大通りの緑化を合理的にあんばいする。商業網や文教・衛生・体育警防などの施設を統一的にあんばいする。公共の文化施設や職員・労働者の住宅をたてて、生産の発展・人口増加の需要にこたえる。

(二十二) 教育事業を発展させる

労働者階級と貧農・下層中農に依拠して学校を管理し、社会主義的自覚があり、教養のある勤労者を育てる。県は農芸・工芸・財務会計・衛生の4つの中等技術学校を経営し、公社は業余農業専科学校を経営するとともに、高・中学校を普及する。中学は農業生産・農業機械方面に関係する課業を充実させる。大隊経営の学校には幼稚園を増設する。青壮年の間の文盲を一掃する。

(二十三) 農村における社会主義文化の

陣地を固め拡大する

社員のどの家にも有線放送がきけるようにしたうえで、野良にいて放送がきけるよう電線を整備・整とんする。テレビを生産隊段階にまで普及する。大隊には文化室（図書室をふくむ）と業余文芸宣伝隊をつくり、農村の体育活動を発展させる。公社はいま一步進んで映画の上映隊や文化ステーションを設けて農村の文化生活を活発にし、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で文化の陣地を占領する。

(二十四) 衛生革命をいま一步すすめる

住血吸虫病の基本的な消滅を基礎にして、なおいっそうその仕事を固め向上させる。愛国衛生運動を積極的にくりひろげ、だれもが衛生を語り、だれもが清潔を愛するようにし、多くの生産隊を“衛生村”の水準にまで引き上げる。“四害”（ネズミ・南京虫・ハエ・カの害）を基本的になくす。農村ではどの家も井戸水がのめるようにし、

どの家の糞便も肥だめに入れ、無害化された肥だめを設ける。ひきつづき大隊の協同医療制度をかため、しだいに医薬費の集団支出範囲を拡大し、社員の基金を減額する。大隊には衛生所を、生産隊には衛生室を設け、計画的にはだしの医者養成し、漢方の薬草を採取し、中西（漢方医学と西洋医学）結合による予防・治療工作をくりひろげ、一般によくある病気や多発の病気は、生産隊内で治療できるようにする。

婦人や子供の保健活動をりっぱにやる。生産隊は託児所を設ける。婦人社員の“四期”（月経期・妊娠期・出産期・授乳期）衛生活動を適切にやる。

（二十五）晩婚と計画出産を提唱する

晩婚と計画的な出産・育児の意義をひきつづき深く宣伝し、避妊薬をくばる隊伍を設け、社員が自ら進んで晩婚計画や出産・育児計画をたてるようにさせる。1980年には、人口出生率を11パーミル（1000分の11）前後におさえる。

（二十六）知識青年の下放工作をひきつづき行う

心から熱意をもって知識青年の下放に関心をよせ、下放知識青年の食事・住宅・医療などの面における問題点を解決するよう適切に援助する。下放知識青年にたいする教育・養成を強化し、かれらのために政治・文化・科学技術学習の条件を提供し、社会主義新農村の建設についてかれらに積極性を十分発揮させる。階級敵による農村破壊の犯罪活動にたいしては、徹底的に叩きつぶす。

（二十七）マルクス主義の理論隊伍を育てる

批林批孔運動のなかで輩出した革命的大批判の働き手を組織し、生産から離れない強大な理論隊伍をつくる。この隊伍は、“政治夜学校の補導員、新聞・ラジオの通信員、政策貫徹の宣伝員、修正主義批判の戦闘員”になるようにする。批林批孔運動と緊密に結びつきつつ、マルクス・レーニンの著作、毛主席の著作を系統的に学習し、つねに社会主義教育をすすめる革命的大批判を積極的にくりひろげ、林彪の修正主義路線を批判し、

孔孟の道を批判し、農村における2つの階級・2つの道の闘争を深くくりひろげ、搾取階級の“四旧”（古い思想・文化・風俗・習慣）を除去する。政治夜学校をよくやり、それによって主として政治を学び、理論を学び、あわせて文化、技術を学ぶ。

（二十八）民兵の建設を強化する

“労武結合”の原則を堅持し、適切に組織を根づかせ、政治を根づかせ、軍事を根づかせ、民兵組織をたえずかため発展させる。保安・消防・民兵の“三位一体”化を実行し、防衛活動をやり、社会の階級闘争に積極的に参加し、階級闘争の観念・戦争に備える観念をつよめ、政治的自覚と軍事技術を高め、平時にあっては生産を防衛し、四類分子（特務・裏切り者・現行反革命分子・死んでも悔い改めない走資派）を監督・改造し、戦時にあっては人民解放軍といっしょになって侵入してきた敵をせん滅する。

（二十九）党の思想建設・組織建設を強める

マルクス主義でいくべきであって、修正主義でいくべきではない。団結すべきであって、分裂してはならない。公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない”という3つの基本原則を堅持し、党の建設を強める。党についての教育と党の組織生活制度を健全にし、新黨員を計画的にふやし、大多数の生産隊に党の小組をつくる。党の一元化された指導のもとに、革命委員会・労働組合・貧農・下層中農協会・婦人連合会・共産主義青年団・民兵組織などの役割を十分発揮する。

各級の指導班は老年・中年・青年の三結合の原則をかたくまもり、プロレタリア階級の革命事業の後継者養成にかんする毛主席の五つの条件にしたがって、新しい幹部を大いに養成し、婦人幹部を養成する。県の「五・七」幹部学校と労農幹部輪番訓練班を運営し、末端幹部の輪番訓練工作をおこなう。県と公社の各級幹部は、集団生産労働に参加する制度を堅持し、「農村人民公社工作条例修正草案」に定められた労働日数を達成・超過

達成するようにする。

(三十) 計画の遂行状況についての点検

人民公社の各級組織 各局、鎮およびそれらの所属企業・事業単位は、そこでの実際から出発し、自分のところの発展計画をさだめ、左右がかみあい・遠景と近景がかみあうようにする。

この計画と年度実施計画の遂行状況は、毎年旧正月の前後にひらかれる貧農・下層中農代表の参加する幹部会議で点検し、経験を総結し、弱い部分をさがし、たえず計画の内容を修正し、計画の実現を保証するようにしなければならない。

訳者あとがき

1) 「嘉定県農業発展計画」(『学習と批判』74年9期)は、昨年末に訳し、解題を添えて編集部に出しておいたものである。そのあと、今年の1月、全国人民代表大会がひらかれ、新しい憲法と政府活動報告が採択・承認された。

政府活動報告で特にわれわれの注目をひいたのは、国民経済発展の今後についての展望のところである。1980年までを第1段階、今世紀末までを第2段階とする展望が語られ、そして、「国務院はこの目標にもとづいて、10カ年長期計画、5カ年計画、年度計画を作成する。国務院の各部、各委員会、地方の各級革命委員会から工場・鉱山企業および生産隊などの基層単位にいたるまですべて大衆をたちあがらせ、十分な討議を経て、それぞれ計画をたて、われわれの雄大な目標の繰り上げ達成をかちとらなければならない」と述べられている。

2) さきに本誌321号で紹介した嘉定県安亭公社新泾大隊の場合でも、ここに紹介する嘉定県全県の場合でも、計画制訂にあたってそれぞれ1年有余の下からの大衆的討議が行なわれたということに注意したい。というのは、このような7カ年計画が、すでに73年8月、9月頃に草案が出来あがり、それが大衆的討議を経て74年の6月ないし8月に「修訂草案」「改訂草案」として発表されているからである。とすると、他の部門でも、すでに73年ごろから、長期展望作成の動きが、末端で始まっていたことになる。

毛主席は、「わが国の人民は一つの遠大な計画

を持たなければならない。数十年内に、わが国を経済・科学文化のうえでのおくれた状況を変え、急速に世界の先進水準に達するよう努力しなければならない」と指示し、また、中国の国民経済の姿は、「1年1年と変わり、5カ年(計画期)ごとに変わり、いくつかの5カ年(計画期)の積みかさねの中で、より大きく変わるだろう」といつている。これらが、いつ、どこで語られたかは、ここでは詮索の限りではない。だが、この言葉の主旨が、周恩来総理の政府活動報告にとり入れられていることは、歴然としている。

3) 四半世紀後の新しい世紀を、長期の視野の中に先取りした10カ年ないし7カ年の遠景計画、5カ年計画、さらには近景としての短期活動計画が、さきにも述べたように74年後半からぞくぞく発表されている。私がみた最初のものは嘉定県新泾大隊のそれであった。

その後、『学習と批判』は、74年9期で嘉定県の発展計画を中心に5編の文章をのせたほか、「自己動手 改变面貌」(上海針織工業自力更生実施技術改造規劃的調査)をのせている。これは工業面における展望計画を知る上で、一読に値する好論文である。

『学習と批判』誌74年10期には、①我們是怎样制訂“万台”規劃的?(上海豐収トラクター工場革命委員会)、②建立一支貧下中農自己的科研隊伍(上海縣七一人民公社的調查)、③制訂和实施規劃是深刻的思想革命(中共嘉定県委員会書記・李鈞)、④技術革新能手談革新規劃、⑤让学生在

学校学到更多的本事（劉行中学的調查）がある。

同誌の74年11期には、①前進農場宣言、②革命青年是建設農場的生力軍（前進農場造林＝連党支部）、③南泥湾精神永放光芒（前進農場五・七連隊党支部）、④亦工亦農好（前進農場銷廠党支部）がある。これらは、上海崇明島の国営農場発展10カ年計画を扱ったものである。

同誌74年12期は、中共崇明県委員会「談談今後怎樣才能繼續大幅度増産糧食」をのせているが、これは崇明県全体の10カ年計画を扱ったものである。

次に、全国人民代表大会後は、「大会精神」に励まされ、全国各地で第4期全人代文献の学習運動がまきおこっており、そのなかで、遠景計画・近景計画制訂の動きも活発になっている。例えば、北京大学の10カ年計画と短期活動計画、上海造船会社と各造船所の造船工業発展10カ年計画などがそれである。

4) 以上あげた各工業企業、人民公社、県の遠景計画、短期計画のいずれにも共通している点は、

①生き生きした大衆自身の言葉で語られており、それだけに創意性と積極性が強く感じられる、
②計画制訂にあたっての諸矛盾が明らかにされ、そのうえで、それらの矛盾をいかに克服すべきかということが、具体的に述べられていること。とくに、資金・資材および労働力の問題を、路線の問題としてとり上げていることが注目される。

5) 遠景計画・短期計画との関連で、資料として目されるものに、①『鞍鋼憲法放光芒』（上海市国営工廠企業的新経験）、②『人民公社在躍進』（上海市郊区人民公社的新経験）がある。ともに上海人民出版社刊で、前者は74年10月に、後者は74年9月に発行されている。但し、私はまだ原文はみていない。

6) ここでお詫びを兼ねて訂正しておきたいことがある。それは、本誌321号（74年11月）に紹介した新泾大隊1974－1980年農業発展計画の訳についてである。この計画の第6項（6頁左段15行目）の「水害・旱害のさいの輪作」は、「水田・畑の輪作」の誤りです。

(28頁よりつづく)

〔解題〕帝国主義国ソ連の分析（佐久間邦夫）

9 5 7 〔時の窓〕政変と外交（岩村三千夫）

〔資料〕

秦皇島（秦文）

香港『文匯報』よりみた“台湾”

蔣介石集団支配下の台湾、経済が悪化
中国・アジア・ソ連の動向（1974年11月
1日～20日）

『人民日報』社説・特集・主要論文目録
（1974年11月1日～20日）

『アジア経済旬報』1974年度総目録